

中高生がSDGsを考える・実践する

ワガママSDGs

REPORT 2021

中高生 × 地域 (企業・行政・大学・金融機関・NPO団体)

中高生が自分事として発見した社会課題の解決——ワガママの実現を協働して「試作(プロトタイプ)」するSDGs実証プロジェクトです。



中高生が「シニアカー」に込めたワガママとは？

わたしのネクストワガママは、

パーソナルモビリティを

ほんとうに**実現**するチカラを

身につけること。(ゆいゆい・高2)

「海外の貧困を救いたい」

そのひとつの**視点**だけに

とらわれていた自分を見つけた。

(あいか・高2)

わたしの「どこでも充電したい」が

「災害現場で役に立つかも」と、

「人のため」につながる**可能性**が

出てきたとき、すごいと思った。

(るな・中1)

人がつながる**場所**をつくったけど、

よく自身が人や地域と

つながれたのかもしれない。

(ゆう・高1)

英語の勉強は、苦手で大嫌い。

海外の同世代との意見交換なんて、

自分に叶えられると思わなかった。

(まーちゃん・高3)

ワガママは言ったもの勝ち。

叶える**難しさ**も、

諦めなかったから**拓ける道**も

肌で学んだ。(ジャクス・高1)

座談会 with 社会人

ワガママだったから、たどりの着いた「想定外」。

「天 気に関係なく気軽に街を移動したい!」というワガママを突き詰めていったら、シニアカーの改造に
行き着き、同時に、シェアシステムやまちづくりへの興味も深めた学生メンバー3名(ゆいゆい、あおい、みき)。協働サポーターとして彼女たちのワガママの実現に力を貸した神戸市職員の岡崎友典さんを交えて、このプロジェクトを振り返ってもらった。

——そもそもはどんなワガママから?

ゆいゆい 「雨の日に傘が浮いたらいいな」って、空想でぼろっと出て。それを「やってみたらいいじゃん」って言ってやらせてくれる環境ってなかなかないので、こんなんでいいのかなって思いながら。

あおい 私は雨の日の自転車通学の時に、濡れないようになってほしいなってところから。

みき 私自身は、いざ自分のワガママって言われた時に、最初は出てこなかった。普段、課題を与えられるばかりで、自分のやりたいことってそもそも聞かれない。みんながやりたいことをぶつけてくれる環境の中で、自分のやりたいことを見つけていった感じだったなって。

——最終的にシニアカーを自分たちが乗りたくるよう
に改造したんですね。

岡崎 協働サポーターとして関わるなかで、自分自身も「答え」は持たないようには思っていたけど、それにしても、想定外のところにたどり着いたと思う。でも、それだからこそよかったんじゃないかな。

あおい 自転車とかいろいろ案はあったけど、シニアカーに行き着いたからこそ最後までやりきれた感じ。ほかの道に行ったら、そもそも最後まで行き着かなかったんじゃないかな。

岡崎 一気にそっちに向かって動き出したよね。

ゆいゆい シニアカーって「高齢者の方が乗るもの」という固定概念があったけど、実際に電動車椅子やシニアカーの試乗に行ったら「これいいじゃん!」ってなって。固定概念外してみたら、いろんな人にとって使いやすいものだった。ものごとをいろんな方面から見ると、まさにこのことだなって。

みき そのあとも思ってもみなかったことはいっぱいあったけど。

あおい そうそう。屋根をつけるにしても、つけてみたら低くて乗れなくて。説明書は中国語(笑)。どうしたらいいんだろうってことばかり。

ゆいゆい でも、自分がやりたいって思ったことだからやりきれたかなって。

みき うん、だからやりきれた。自分のワガママを叶えていくために、答えがないことをやっていくのがその過程も含めて楽しかった。それを楽しいと思えたのが、自分にとっては一番の収穫かも。

免許がない私たちの、雨天用MaaS (Mobility as a Service) 開発

中高生3名(ゆいゆい・高1、あおい・高2、みき・中3)と協働メンバー4名(神戸市役所、IT企業経営者、神戸製鋼、NPO)のチーム。

自転車通学の中高生が、雨の日に快適・安全に移動できる方法として、免許なしで公道を走行できる「シニアカー」に着目。別注の屋根をつけて走行実験し、デザイン性を考慮して装飾も検討した。

オンライン国際交流

「みんなの学び舎 ~ for myself ~」
中高生1名(まーちゃん・高3)と協働メンバー3名(大学生、NPO、在米教育関係者)のチーム。

「海外にいる同世代と友だちになりたい」「途上国への国際貢献を自らできる機会がほしい」というワガママを叶える第一歩として、日本の中高生と東南アジア諸国の同世代が国際交流(学習)するオンライン教室を4回実施。英語でSDGsをテーマにディスカッションした。

一問一答 ワガママを叶えられなくても。

学 校も考え方も違う3人が「理想の学校」を考えて活動した。ディスカッションを中心としたイベント企画「わがままを叶える3時間」を企画するも、人が集まらずに中止に。そこから、「学校に対するみんなの意見を聞きたい」という軸をぶらさずにアンケートを実施。結果、103名の中高生のリアルな声を得ることができた。

学校嫌いの3人が考える「行きたくない学校」

中高生3名(にな・中3、ジャクス・高1、みゆ・高2)と協働メンバー4名(神戸市役所、H2Oリテイリング、大学生、在米研究者)のチーム。

「私たちが求めるのはゆるさではない。選択肢だ!」と、学校の固定的なカリキュラムへの問題意識から、ディスカッションを中心とした「理想の学校」イベントを設計。イベントの実現は叶わなかったが、それぞれの学校の先生たちをも巻き込んだリサーチを実施。

——このチームを立ち上げた理由は?

にな 集団が苦手で、自由じゃないのが嫌。学校をもっと楽しくしたいというのがありました。ジャクス LGBTQに関する社会のあり方について、教育から変えていけないかなというところからです。

みゆ ただただ、学校生活で自分が困っていることを改善したいという気持ち。それが話し合いを通じて、ほかの2人とつなげられたと感じています。

——特に印象に残っていることは?

ジャクス イベントが実現できなかったことです。ワガママを叶えるって、難しいことなんだなと。

にな 103人からアンケート回答もらえて意外だったのは、「学校を好きな理由」が授業内容というよりも、「友達がいるから」とか「クラスは楽しくないけど部活が好きだから」とかだったこと。みんながみんな、自由を求めているわけじゃないんだなって。思い込みが外れました。

みゆ アンケートに協力してくれるだけでも嬉しかったのに、「このような場を持ってくれたことに感謝します」と書いてくれた子がいて。その子が意見を出すきっかけを作れたのがよかったなって思っています。

中高生 × 地域 (企業・行政・大学・金融機関)

挑戦、プロト

2021年8月~12月(一部2022年1月)、17名の中高生が、近いワガママを抱える者どうしで6つのチームを組み、ワガママの実現に向けたプロトタイプに挑戦。

それぞれのチームには、企業、ITエンジニア、銀行、社会貢献団体、市役所……さまざまな社会人が「協働メンバー」として参画しました。

苦手も力になる、はず。インタビュー

も ともと途上国の学生に向けた教育支援をおこないたいと思っていたんです。でも、ヒアリングを重ねて気づいたのは、必要とされる教育が国ごとに違うってこと。なので、交流をメインとしたプログラムを実施することになりました。真面目なだけじゃなく、小さい頃に流行ったお菓子の話で盛り上がった。でも、そういうのこそ、海外の人に伝えるのがとっても難しいんですよ。

中高一貫校の高3なんですけど、通っている学校が「成績主義」が強くて。テストの点数によって上位クラス、下位クラスに分けられて、先生の扱いも違う。高1で頑張って上位クラスに行ったんですけど、友人関係も固まってるし勉強もついていけない。ほぼ1年間不登校になって外の世界を知ったことで、学校以

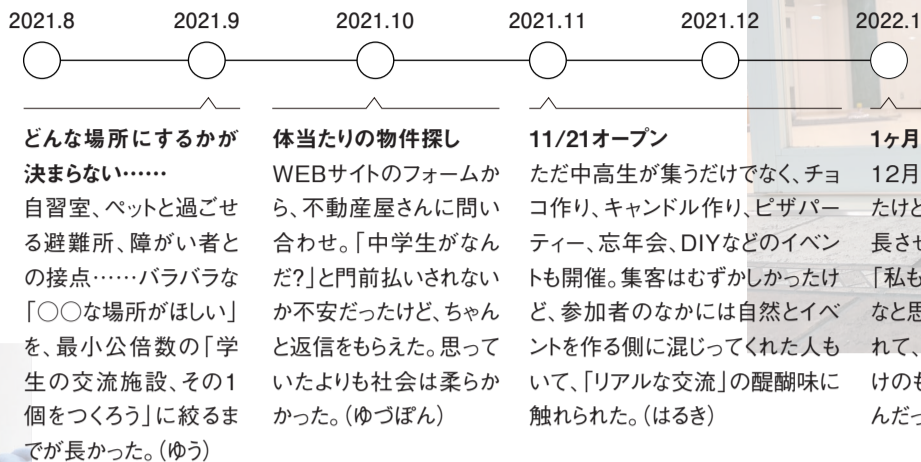
外の居場所が大事だと思って思うようになりました。

活動を通して、「自分にもできることがあるし、できないこともある」って感じました。英語が苦手なんです。それなのに海外の人と喋りたいって(笑)。でも、できないところを「できません」って言うって人に頼って、そのぶん、自分にもできることを言うこともすごく大事だなと感じたんですよ。いまは、やっぱり英語喋れるようになりたいなって思っているんです。通訳を紹介するんじゃなくて、もっとコミュニケーションを取りたいなって。それに、私が英語を喋れるようになったら、私みたいな子もできるようになるって言えるし、そんな子の気持ちもわかると思うんですよ。

タイムライン

行動したら、「頭で思い描いていたこと」以上が起こった。

評価のためではなく、自分たちがやりたいことを思いきりできる「学生の学生による学生のための場所」
 中高生6名(はるき・高1、ゆう・高1、ゆづぽん・中3、のん・高2、まお・高1、かむい・中3)と協働メンバー4名(阪急オアシス、六甲バター、京都信金、IT企業経営者)のチーム。
 18歳未満の学生が保護者や学校からの制約なしに、「当事者」として自由に集まり、交流できる施設をJR新長田駅近くの商店街エリアに開設。チーム内で運営ルールやシフトを決めて実証的に運営した。



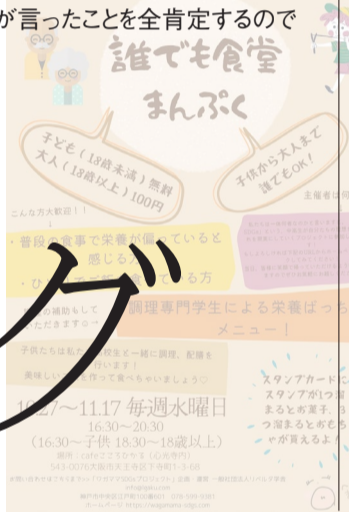
「誰でも食堂」で生まれたものは?

レポート

同じ高校から参加した2人のワガママは、「海外の貧困問題を解決したい!」というもの。「YouTubeやテレビCMから流れてくるのを見ていて、直接は行けないけど食べ物を送るとかできないかなって思っていました(あいか)。でも、2人の考えは協働メンバーやコーディネーターと議論を重ねる中で変わっていった。「私たちが言ったことを全肯定するので

はなく、視点を広げるようなアドバイスをいただいて。国内にも貧困問題があることを調べて、一方的な依存関係を生むだけにならないような支援の仕方考えました(ひろ)。2人がたどり着いたのは、お客さんと一緒にご飯をつくる「食堂」。近所のお寺に交渉し、カフェを借り、ちらしを配り、1週間に一度、一ヶ月間、「誰でも食堂」を開いた。徐々に地域の方が来てくれるようになり、2人が気づいたことがあった。「貧困ばかり頭にあったけど、実際に来てくださる方はそんな感じじゃなくて、むしろ一人で食べるのが寂しいのかなって思ったんです(あいか)。「お客さんの子ども同士がバイバイって手を振り合ったり、一人で来てくれた40代くらいの男性とお話した時にすごい笑顔になって楽しそうにしてくれたり(あいか)。最初に思い描いていたこととは違う形になったけれど、自分たちが動くことで、誰かの喜びにつながることを知った。

高校生が考える、進化系「こども食堂」
 中高生2名(あいか・高2、ひろ・高2)と協働メンバー2名(調理専門学校とNPO2名)のチーム。「孤立する人々に食事とともにコミュニケーションを提供したい」という思いから、多世代交流の場となる「まんぶく食堂」を、お寺の協力などを得て4回開催。調理専門学校の学生も協力を募り、栄養にも配慮した食事を提供した。

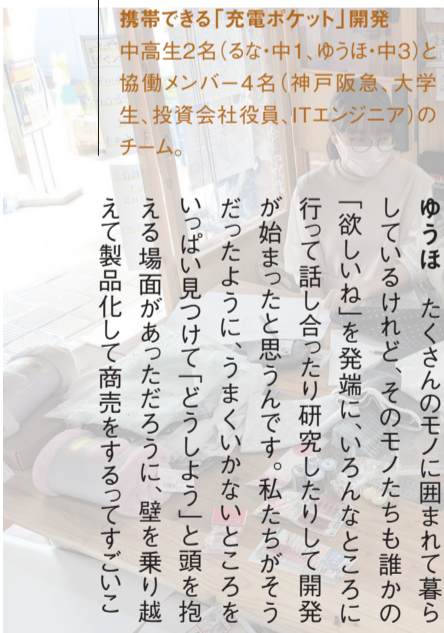


関・NPO団体)で、SDGsを考える。実践する。

、タイプピング

街中にいるときや災害時にスマホの充電が切れたらイヤ!
 携帯できる「充電ポケット」開発
 中高生2名(るな・中1、ゆうは・中3)と協働メンバー4名(神戸阪急、大学生、投資会社役員、ITエンジニア)のチーム。

女性の既製服にポケットが少ないことにも目を向けて、取り外し可能なポケットを2回にわたって試作。試作前には、紳士服テーラーでポケットを学んだ。衣類と充電機能の同期方法の検討では、先行研究をしていた大学に問い合わせたことも。



ゆうは たくさんのモノに囲まれて暮らしているけれど、そのモノたちも誰かの「欲しいね」を発端に、いろんなところで行って話し合ったり研究したりして開発が始まったと思うんです。私たちがそうだったように、うまくいかないところをいっぱい見つけて「どうしよう」と頭を抱える場面があったら、壁を乗り越えて製品化して商売をするってすごいこと

なかつたな。
 ゆうは たくさんのモノに囲まれて暮らしているけれど、そのモノたちも誰かの「欲しいね」を発端に、いろんなところで行って話し合ったり研究したりして開発が始まったと思うんです。私たちがそうだったように、うまくいかないところをいっぱい見つけて「どうしよう」と頭を抱える場面があったら、壁を乗り越えて製品化して商売をするってすごいこと

座談会 with 社会人

「頼る」を学ぶ。

「ス」
 マホの充電を切らせたたくないから、いつでもどこでも充電できるものが欲しい(るな)と「ポケットのない服が多くて、スマホやハンカチの持ち運びに困る。取り外し可能なポケットが欲しい(ゆうは)の2つのワガママを掛け合わせて始まった充電型ポータブルポケット(「充電ポケット」)づくり。
 プロトタイプ中の試行錯誤を、協働メンバーの川畑嘉治さん(株式会社阪急神戸百貨店 神戸阪急神戸スタイル開発部)と振り返りました。

川畑 現地調査でふたりが百貨店に来たとき、ポケットへの情熱の強さに驚いたんです。オーダースーツ売場で、僕が「ここに付いているポケットにはそんな意味があったのか」と今まで疑問に思ったこともないようなことも質問して。ゆうは あんなにまじまじとポケットを見たのは初めてでした。スタイリッシュに見えるためにスーツに施されている工夫を伺って、「スマホでポケットが出っぱるのかっこ悪いこと」と知りました。私はそういうことを気にしないタイプなので、美意識を学んだというか。

川畑 頼れる存在がいるって心強いですよ。だから、人に出会う、会いに行くって、大事だと思います。殻に閉じこもらず、「コミュニケーション」を広げてみる。
 ゆうは まさに閉じこもっていました! 私は裁縫が大の苦手なんです。学校の課題って、ひとりやり遂げないとだめじゃないですか。友だちに代わりをしてもらわなくてもいいから、だから、「苦手だけががんばらなきゃ」とポケットの製作に臨んだけど、裁縫が得意な人を探して頼る手もあったんですよ。「自分でがんばらなきゃ」が刷り込まれていたこと、勉強以外では「がんばらなきゃ」が進行の妨げになり得ることを、今回経験して気づけてよかったです。

とだたと痛感しました。
 川畑 仕事で12年ほど、いろんな人たちとモノづくりをしていたんだけど、ひとつの突破口は、足りない能力を借りることかもしれない。自分でできる範囲、やれる能力で自分でわかるじゃないですか。足りない部分を、この人に頼めばこんなことができる、あの人に尋ねたらあんな技術が得られそうといったことを組み合わせながら、乗り越えていく。作り上げていく。
 るな プロトタイプ製作では、もっちゃん(チームのコーディネーター)に技術面を助けられました。「まち針よりもクリップで留めた方が縫いやすいよ」とか教えてもらわなかったら、もっと手間取っていたはず。気持ちの面でも、一緒に作れて楽しかったです。

川畑 まだ世にない「充電ポケット」の製作は、ほんとに難しかったです。先日、充電できるポケットを製品化しようとしている外国企業のことを記事で読みました。それだけおふたりの「充電ポケット」のワガママは先進的だったし、社会——世の中の人たちの「欲しい」にもつながる企画だったということ。協働できてうれしかったです。

2021年度プログラム

審査員 ——— ワガママSDGs

鶴田宏樹氏 (神戸大学バリュースクール 准教授)

子供のわがままを大人が叶える。そんな甘やかしがアントレプレナーシップ教育なのか。私はそんな考え違いをしていた。

“子供たちが自分達のわがままを実現する”。これが、ワガママSDGsの本質であった。自分を内省し「したいこと」を、言語化し仲間と共有する。そして、社会に与える価値を考えて実装しようとする。そこで、様々な学校の中学生・高校生が生き生きとプロジェクトを回す姿を目の当たりにして驚いた。

ここには、自らが持つ「期待」から「価値」を生み出す経験をするという教育的意義、そ

して、地域に存在する様々なステークホルダーが巻き込まれ、あたかも地域社会の変革につながっていくという社会的意義があった。日本の教育も現在詰め込み型教育から、自由な発想や社会問題への関心を促す教育の形へと変わろうとしている。その状況の中で、ワガママSDGsはそのフロンティアとなる試みかもしれない。

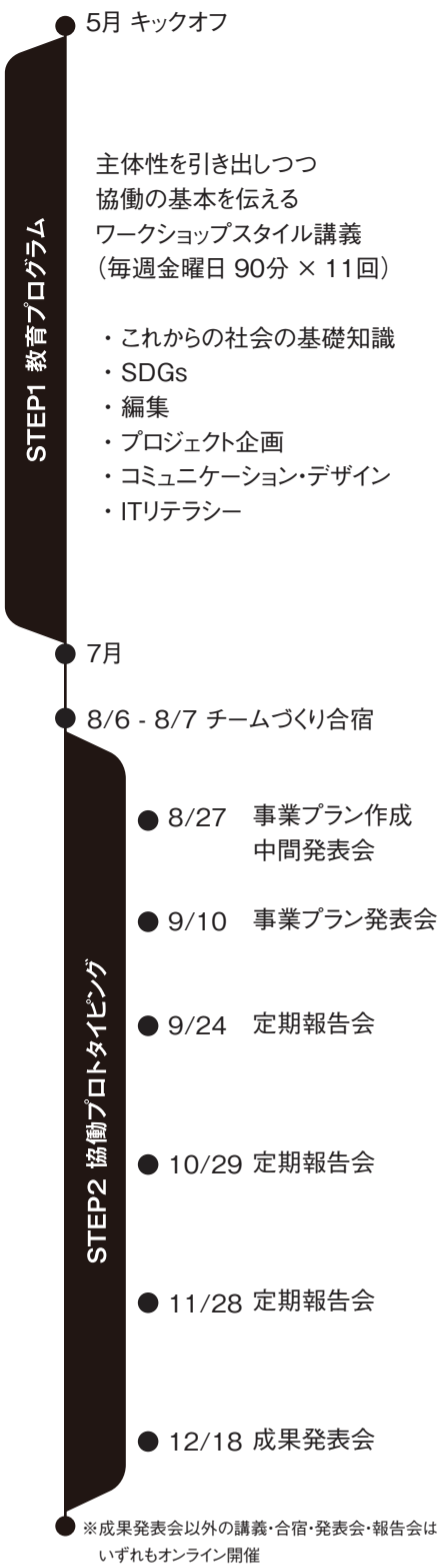
今後の社会変革への強い意気込みが運営者にあることを感じ取ることができ、教育を通じて社会構造が変わっていくことを予感させる素晴らしい事例である。

西田哲也氏 (エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社(兼株式会社 阪急阪神百貨店) 経営企画室 サステナビリティ推進部長)

「中高生のために」という貢献発想ではなく、「一緒に」という共創発想で取り組むと何か新しいコトが産まれる予感がし、ワクワクしました。今回参画された中高生に「ワクワクさせてくれてありがとう」と伝えたいです。

そして今回参画したことで、もう1つ嬉しいことがありました。それは一緒に参画した社員の「心の持ち方」が大きく変化したことです。自分がしている仕事が社内に

とどまらず、地域に、そして社会にどのように繋がるのか、そして影響を与えるのか、そんなことを意識した発言や提案が多くなりました。「〇〇さん、いいよね、素敵になったよね」と周りから言われるたびに参画して本当に良かったなあと思います。最後に今回参加した中高生とは何か続きがしたいなあと思います。未来に続く物語の続きを一緒に創りたい、そんな風に思ってます。



「もうちょっと現実的なものを作ったらと口を出しそうになっただけ、自分たちが最初に思った『コレ!』をカタチにする過程に意義があったんだろうな。楽しいとしんどいが、ずっと行き来していた様子」(坂本友里恵) 「頭でしかない見通しを立てても、たいていリアルに実行する段で泥臭く試行錯誤することになる。それを実証的に学べるプログラムってじつは稀有かもしれない」(唐津周平) 「インプットとして情報も課題意識ももち合わせている。でも、どうアウトプットしたらいいかわからない。そんな中高生たちが『半径1メートル』の身近な範囲でアクションを練って実行できる場だった」(江副真文) 「グローバルな視野で課題意識を携えていた中高生は、『半径1メートル』に引き寄せる際、折り合いのつけかたが難しかったと思う。でも、プロトタイピングでリアルな反応を得るにつれて、手応えをつかんでいった」(大福聡平) 「プロトタイピングを通して進路を見定めた中高生もいた。途中、湧いたり寄せられたりするアイデアに中高生たちが右往左往する場面もあったけど、自分たちで『これを実現する』と言語化して立ち戻っていった姿が印象的」(坪田卓巳)



<後援>

<審査員>

	吉田幸司氏 (審査委員長) 株式会社自然エネルギー市民ファンド 代表取締役 弁護士
	嶋田康平氏 日本財団 経営企画広報部 ソーシャルインベーション推進チーム
	宮崎光世氏 兵庫大学 現代ビジネス学部 教授 神戸市CDO補佐官
	鶴田宏樹氏 神戸大学バリュースクール 准教授
	西田哲也氏 エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社 (兼株式会社 阪急阪神百貨店) 経営企画室 サステナビリティ推進部長

中学生	17名	中学1年生～高校3年生が15校から集結(すべて個人参加)。
コーディネーター	5名	地域のさまざまな団体で学生支援をしてきた精鋭たちが運営。
協力(大学)	2校	地域で価値共創を試みる2つの大学から、教授と学生が参加。 ▶ V.School(国立大学法人神戸大学バリュースクール) ▶ 武庫川女子大学経営学部
協力(NPO)	1団体	教育プログラム提供 および プロジェクトの継続サポート。 ▶ Code for Japan
講師	6名	編集、演劇、IT、事業計画—— 各界のトップランナーが、中高生向けにワークショップスタイルのオリジナル講義。
協働サポーター	16名	技術やマーケティングの専門的知見をアドバイス。サポーターどうしの横のつながりも。

一般社団法人リベルタ学舎
〒650-0033 神戸市中央区江戸町100番6F コミューン99
TEL : 078-599-9381 E-mail : jibun@lgaku.com

ワガママSDGs

https://wagamama-sdgs.com